



第38回札幌くらぶサロン

朗々と豊かに歌うコントラバス

令和6年1月21日(日)、純白の雪が降りしきる中、第38回札幌くらぶサロンが「豊平館」2階広間にて開催されました。

今回はいつもの三部構成ではなく、コントラバス(以下Cb)によるニューイヤースァロンコンサートと交流パーティーの二部構成で行いました。この事情についての説明は割愛しますが、当会としては少しでもよい形式を求めて検討と試行錯誤を重ねているところです。

第一部「ニューイヤースァロンコンサート」

まずはCbの下川朗さんの演奏です。仲鉢莉奈さんのピアノ伴奏で、ボツテジーニ「カプリッチョ・デイ・ブラヴァー」、シューベルト「アルペジオーネソナタ」等が演奏されました。

下川さんは札幌に入団してからまだ4年ですが、その活躍には目覚ましいものがあります。2021年の新進演奏家育成プロジェクトオーケストラシリーズ



ズで札幌とクレーゼヴィツキーのコンチェルトを共演したほか、最近では奥井理ギヤラリーで演奏会を行うなど、ソロやアンサンブルで大活躍の若手演奏家です。

Cbは高さも幅も厚みもある大きな楽器で、弦も太いので演奏するのは大変です。しかし一たびその巨体に命が吹き込まれると、表情豊かに歌う楽器でもあります。下川さんは、深く響く重低音から軽やかに歌う高音までを駆使して、多彩な表現力と豊かな音楽性で、私たち聴衆を魅了してくださりました。

一曲目のボツテジーニは大変な難曲だそうで、ハーモニックス奏法などを多用した高音域の速いパッセージが続きました。下川さんの鮮やかな技巧が冴えわたりました。シューベルトは、美しい旋律をたつぷりと味わえる曲ですが、ここでは下川さんの豊かな歌心が感じられ、シューベルトの音楽世界に浸ることができました。ピアノ伴奏の仲鉢さんの堅実な演奏も好印象でした。

演奏の合間にはマイクを持つての軽妙なトークもあり、楽器

の紹介やクイズなどを織り交せて楽しく進めてくださいました。

第二部「ニューイヤール交流パーティー」

パーティーの冒頭では、楽譜支援金の贈呈が行われました。上田文雄会長が欠席のため、武藤典典副会長より札幌の鳥居和比佐専務理事に目録が手渡されました。目録には「私たちは札幌が奏でる素晴らしい音楽が響き合う札幌を誇りに思い、札幌に感謝しながら、これからも素晴らしい演奏を私たちにお聴かせいただきたく、応援を惜しみません。」との言葉が添えられており、鳥居様からは謝辞を頂戴しました。

コロナ禍により自粛していたパーティーですが、前回のサロンより再開しました。札幌くらぶ会員、四宮わか子さんの発声



楽譜支援金の贈呈



札幌コントラバス奏者 大澤敬さん

で、スパークリングワインを手にしての乾杯。演奏を終えたばかりの下川さんと仲鉢さんも輪に入ってくださり、50名ほどの参加者が、ワインを飲み、オードブルをいただきながら音楽談義をするという、幸せな時間を共有しました。札幌からはCbの大澤敬さん(札幌Cb奏者の中で、一番ダイナミックなボウイングをされる方です)も参加され、親しくお話をすることができました。下川さんと大澤さんは前日の小樽公演、翌日のニューイヤールパーティーと連日お忙しい中、最後までお付き合いいただき感謝感激です。

会の終盤、余興として恒例の抽選大会があり、当選者にはサイン入りの札幌カレンダーやチケット交換券がプレゼントされ、村岡範男副会長の締め乾杯で楽しい会を閉じました。

会員／多田真一

3月5月 名曲 定期 Italianシリーズ定期演奏会 演奏会を楽しく聴くために

八木幸三(札幌くらぶ顧問)

名曲コンサート

3月16日(土) 14:00

指揮 川瀬賢太郎

トロンボーン 中川英二郎

トランペット

エリック・ミヤシロ

サクソフォン 本田雅人



©Yoshinori Kurosawa

川瀬賢太郎

を代表する作曲家
コーブランドが、
アメリカのモダン・バレーに新風
を巻き起こしたマ
ーサ・グレーアム
の委嘱作品。結婚
式に参加している
人々や新郎新婦の

■マルケス

ダンス第2番

メキシコの現代音楽作曲家であるアルトゥロ・マルケスの代表作で、彼がメキシコ各地を旅した際に、キューバ発祥の音楽とダンスのジャンルであるダンスの音楽とダンスに触発され

ズムに乗りながら、弦楽器などが切れのある旋律を勢いよく奏でていく。中間部のトランペットの独奏と共にノリノリの札響に大注目だ。

■コーブランド

「アパラチアの春」組曲

この曲が作曲された。どこか郷愁を誘うクラリネットの独奏からはじまり、オーボエが加わり、多彩な打楽器によるラテンのリ

19世紀初頭のアパラチア山地の春。新築の農家でおこなわれる若い開拓者の結婚式が舞台のこのバレエ組曲は、アメリカ

■和泉宏隆(E・ミヤシロ編)

「宝島」

吹奏楽の定番曲として有名なこの曲は、多彩な編曲により耳馴染みのことだろう。最近では映画「異動辞令は音楽隊」で阿部寛

がこの曲をドラマでカッコよく軽快に演奏していた。原曲は日本を代表するフュージョンバンド「E-SQUARE」の代表曲で、元同バンドメンバーで現在ピアニストとして活躍している和泉宏隆が作曲している。筆者も吹奏楽指導で何回も演奏していたが、何度演奏しても盛り上がる名曲だ。

■エリック・ミヤシロ

Sydvance

TV「題名のない音楽会」でもお馴染みのエリック・ミヤシロは、ハワイ生まれのトランペッター奏者。スタジオ・ミュージシャンとして活動するとともに一流演奏家を集め、自らのビッグバンド「EMバンド」を結成。彼の作曲によるこの曲は、リズムセクシジョンの軽快な伴奏にのって、広がりのある爽やかな旋律が、大空を優雅に舞うように演奏される。当日もミヤシロによる高音域によるハイノート・ヒッターが聴けることだろう。

トランペッター奏者、兄幸太郎氏が作・編曲家、さらに叔父たちや祖父も演奏家と音楽一家の中で育った。幼少期からジャズに興味を持ち、8歳のときにはトロンボーンで父親のバンドに参加している。高校生のときにはスタジオ・ミュージシャンとして活動し、現在ニューヨークを拠点に世界的に活躍。この曲は、彼の代表作で力強いオスティナートの伴奏と中川自身による超絶技巧のトロンボーンがグルーヴィーに奏でられることだろう。

第60回定期演奏会

4月20日(土) 17:00

21日(日) 13:00

指揮 川瀬賢太郎

■チャイコフスキー

交響曲第4番

半世紀後のアイヴズ77歳の時である。彼はかなり早い時期から無調主義や多重リズム、さらには4分音による作曲の試みをしてきたが、この曲はオーソドックスな作曲技法により、アメリカの古き良き時代を感じさせる雰囲気を出している。そして、5つ目の終楽章では、意外な結末を迎える。

■アイヴズ

交響曲第2番

アメリカの革新的異色作曲家と呼ばれたアイヴズは、大学で作曲を学んだものの「不協和音で餓死するのは御免だ」と生命保険業界に入り、副社長にまでなった。多忙の中でも終生作曲活動に励んだ。この作品は、30歳頃に書かれた交響曲だが、バインスタイン指揮のニューヨーク・フィルで初演されたのは約



©Simon Yu

中川英二郎



エリック・ミヤシロ



本田雅人

■中川英二郎(中川幸太郎編)

Into The Sky

吹奏楽のトロンボーン奏者には中川英二郎は、たぶん神様の存在であろう。彼は、父喜弘氏が

この交響曲は決して標題作品ではないのだが、チャイコフスキーは、彼の有名なパトロンであったメック夫人に手紙の中で、この曲について詳細な説明をしている。第1楽章は、この交響曲全体の精髓、運命(主想旋律)である序奏にはじまり、それは幸福や夢を絶えず妨げる。第2楽章は、仕事に疲れ果てた人の悲哀の楽章で、第3楽章は、酒を飲んで酩酊した時のような気まぐれな唐草模様、第4楽章は、周囲の喜びに満ちた人々の中に入って生きる希望を持つと言うもの。これらの内容は、この作品が書かれた直前の結婚生活の失敗や自殺未遂事件など作曲家の生々しい心情が反映されているようだ。

Hitau シリーズ定期演奏会
第17回

4月25日(木) 19:00
指揮 広上淳一
ヴァイオリン ポリス・ベルキン



©Masaaki Tomitori

広上淳一



©Pietro Cinotti

ボリス・ベルキン

スタルジックな楽想が心に染み入ってくる作品だ。

■ブルッフ

ヴァイオリン協奏曲第1番

■尾高惇忠
音の旅ーオーケストラのための

3年前、尾高惇忠が亡くなった直後の札幌定期において、実弟忠明の指揮、宮田大を独奏者に迎えて世界初演された「チェロ協奏曲」の感動は今も心に残っている。今回の尾高作品は、原曲が宮澤賢治の童話を題材とした彼のピアノ連弾作品である。その後「種山ヶ原」が追加された全15曲からなる管弦楽版が、広上淳一の指揮、宮崎国際音楽祭管弦楽団により初演された。ノ

叙情的で優美な旋律でヴァイオリンの魅力がたっぷり味わえるこの曲は、ブラームスやメンデルズゾーンと並び、ヴァイオリン協奏曲の中でも傑作中の傑作だ。ブルッフは、ヴァイオリン協奏曲を3曲残しているが、コブレンツの管弦楽団指揮者を務めていた28歳の時に書かれた第1番が最も有名になった。旋律は、いくぶん感傷的な甘さがあり、ヴィルトゥオーソ好み

徐楽章、そして躍動的で華やかな盛り上がりを見せる終楽章へと続く。

■ムソルグスキー(ラヴェル編)

組曲「展覧会の絵」

この曲は、作曲者が親友であった画家の遺作展を訪れたときの印象がもとになって生まれ、ピアノ独奏作品として一ヶ月足らずの短期間で1874年に書かれた。ムソルグスキーの生前

中は演奏されなかった原曲が、R・コルサコフにより改訂され、コルサコフの弟子が管弦楽化した。1922年、原曲から半世紀を経てラヴェルが編曲した版が最も良く演奏されるようになった。また多くの作曲家が協奏曲やピアノ曲などに編曲し、まるでリレーのようにこの作品は受け継がれ、原曲の魅力が形を変えて今も生き続けている。

第661回定期演奏会

5月25日(土) 17:00
26日(日) 13:00
指揮 井上道義
ピアノ 北村朋幹

■武満徹

地平線のドーリア

8人の弦楽奏者の後方に、そのエコーを奏するでもいった9人の弦楽器が位置するこの曲は、大きく3つの部分から構成されている。非メトロノーム的リズムのゆったりとしたテンポで、清澄で、純粋な生命の宇宙的な観念が静かに浮かび上がる。題名のドーリアとは、ドーリア

旋法のこと、ここでは線的な動きとしてあらわれ、要所に、自由なドーリア旋法が用いられる。日本の伝統的な音楽の静謐の美学と、官能的で、ほとんど内

触角的感覚を持ち合わせた実に武満らしい作品である。1966年度クーセヴィツキー財団委嘱作品。

■武満徹

アステリズム

スコアの扉には、「星群、星座、光の反射をうけると、星状の光彩をしめすある種の鉱物の結晶に見られる固有性」などと辞書からの引用が掲載されている。この作品は、ピアノと管弦楽が、



井上道義
©Yuriko Takagi

北村朋幹
©Taka Mayumi

(写真協力 札幌交響楽団)

ある時は極めて精緻な音の星座を、またある時は激しい充実した音の星群の運動を作り出している。後半では、非常に長い爆発的な管弦楽によるクレッシェンドがあり、その後静寂の中でピアノが断片的なモチーフを奏でる。

■クセナキス

ノモス・ガンマ

ルーマニア生まれのギリシヤ系フランス人で建築家でもあったクセナキスは、第2次世界大戦中にギリシヤ国内で反ナチス・ドイツのレジスタンス運動に加わり、銃弾で左目を失う。大戦後も欠席裁判で死刑が宣告されるなど波乱に満ちた人生をおくる。数学的な作曲技法で現代音楽に大きな影響を与えた。この作品はクラスター的弦楽器のざわめきや木管・金管楽器と打楽器の響きが縦横無尽に飛び交い、重厚な音の束が聴き手に迫ってくる。

■ラヴェル

ボレロ



同じリズムを何度も繰り返して聴くと人は陶酔状態におちいることがある。ロック音楽は正にこれだ。管弦楽曲でこの効果をこれほど上手く取り入れた作品は希だろ。ボレロのリズムにのせ、たった2つの旋律が変奏もせず交互に9回ずつ繰り返されるだけの曲。しかし、普段オーケストラではあまり使われないソプラノサクソフーンや変ホ調クラリネットなどの独奏、大胆な楽器の組み合わせなど「管弦楽の魔術師」とまで言われたラヴェルの面目躍如たる傑作がこの曲だ。

はなざわりようへい
ホルン奏者 花澤良平さんに聞く

空間を感じさせる音に魅かれて



©K.Seki

プロフィール

千葉県出身。国立音楽大学卒業。これまでにホルンを大森啓史、西條貴人、日高剛の各氏に師事。2019年小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XVII に参加し、ビゼー歌劇「カルメン」に出演。PMF2022 オーケストラアカデミーに参加。6ヶ月間の試用期間を経て、11月1日付で札幌交響楽団に入団。

「さまざまあるオランダ人」
冒頭がカッコいい!

出身は千葉県です。九十九里浜の近くにある山武(さんむ)市の松尾町という所です。

小学校1年生から4年生まではサッカーをやっていました。が、冬の活動がとて寒くて大変だったのでやめてしまいました。

その後、5年生の時に金管部という部活に入りました。そこは英国式の brass band でしたので、使用楽器の中にアルトホルン(形はユーフォニアムに似ている)というのがあって、それを吹くことになりました。本当はホルンを吹きたかったのですが、金管部では使われていなか

ったのです。アルトホルンはホルンと違いF管ではなくEs管の楽器で、サクソフォーンを作ったアドルフサククスが作ったサクソルン属に属する楽器です。初めての楽器でEs管の音感が付いてしまったために、F管の楽器を吹いているのに未だにEsの音感で聴こえてしまっています。

中学校からは吹奏楽部に入り、小学校の金管部の時からずっとやりたかったホルンをやることができるようになりました。

ホルンの魅力は何といっても空間を感じさせる音、そして音色の幅の広さです。中学校では音楽の授業で音楽鑑賞があり、その時にワグナーの「さまよえるオランダ人」の冒頭を聴き、

とてもカッコいいなあと思いました。オーケストラでこの楽器を演奏したいと強く思ったのを覚えていています。



アルトホルンを担当していた小学生時代
正面のチューバの方の譜面台の前が私です

ていたので音楽以外にできることがあまりにも無いのと、やる気も起きなかつたためです。そのため現在は「音楽家」のような感じになって、とても安心していきます。

札幌とギターの音響…

その中に溶け込みたい

初めて札幌で演奏させていたのは2021年末のジルベスターコンサートでした。その半年後に2022年のPMFに参加して、その時に札幌の演奏を聴かせていただき、さらに半年後には札幌のオーディションを受けて、合格ということになりました。

札幌は素晴らしいオーケストラだと思っています。キララのクリアで柔らかい音響、札幌はその特色を最大限引き出していると思えました。自分もその中に早く溶け込めるようになりたいと思っています。

指揮に自分の身体が

動かされているように

中学校までの成績はいい方だったので、ホルンにのめり込むうちに高校からは成績がどんどん悪くなってしまったのは、今では良いような悪いような思っています。

大学時代は旭川出身の西條貴人先生に大変お世話になりました。音の作り方を一から教えていただいた

魅力を感じる演奏家はたくさんいます。特にジャンルをクロスオーバーさせるような演奏家



PMF2022 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
ホルン奏者のサラ・ウィリスさんと
ホルンパートの方たちと

の方には特に魅力を感じます。
エルダー・ジャンギロフとい
うジャズピアニスト、ホルンだ
とホセ・ソゴルブさんとも
好きです。活動に垣根がない方
に本当に魅力を感じます。

指揮者では、自分の身体が勝
手に動かされてしまっているか
のような感覚になる、または聴
いていてそう感じさせてくれる
指揮者に魅力を感じています。

何年か前に、西條貴人先生が
所属している都響にエキストラ
で呼んでいただきました。クラ
ウス・マケラの指揮でシヨスタ
コーヴィチの「交響曲第7番」を
演奏したのですが、指揮によつ
て引き出されるものが大きすぎ

て、まるでマケラさんに自分の
身体が勝手に動かされているよ
うな感じがしたのです。本当に
未体験なことでも鳥肌が立ったの
を覚えています。そのことが今
まで生きてきて一番印象的で、
ある意味ショックキングな出来事
でした。

マケラさんのその思い出が強
いため、またシヨスタコーヴィ
チの第7番を演奏したいと思っ
ます。第10番もしたいと思っ
ています。

ブルックナーのワグナーチ
ューバを使う楽曲も演奏した
いです。ワグナーチューバはま
だ「春の祭典」でしか吹いたこと
がないので、ハーモニーを感じ

ながら吹いてみたいのです。あ
とは、高校時代にはマーラーに
どハマリしていたので、生涯で
交響曲をすべてやってみたいと
思っています。

ひっそりと地道に

ソロにも力を入れたい

一日の練習時間は平均して2
時間くらいかと思えます。日に
よってかなりまちまちなので平
均するとこのくらい。もう少し
練習を日課にしたいなと思っ
ています。

学生時代と卒業した少し後に
コンクールを何度か挑戦したこ
とはあったのですが、あまり良
い結果では無かったため、これ
からはひっそりと地道に！ソロ
にも力を入れたいなと考えてい
ます。

これは趣味という感じにはな
ってしまおうと思うのですが、ピ
ートボックスを聴くのが大好き
なので、趣味程度に演奏できる
ようになりたいなと思っていま
す。ピートボックスは唇や舌、喉
を使って主に一人でメロディや
リズムを演奏するものです。タ
ッグやクルーのように複数人で
ピートボックスが演奏する形態
もあつたり、ループステーション
という機械を使って演奏する



札幌芸術の森『昇』
photo by Ryohei Hanazawa

カメラを買ったのでまた撮る意
欲が湧いてきました。

札幌は四季がはっきりとして
いて、表情豊かなと感じます。
今までは平地に住んできたの
で、山が周囲にあるのも新鮮で
すし、動物が身近にいることに
もとても驚いています。自然が
豊かで素晴らしいと思います。

冬を過ごすのは少し怖いなど
思っていたのですが、過ごして
みたら、時々滑ってしまうのが
怖いだけで、モノトーン好きな
自分にはとても好きな景色ばか
りで、快適です。食べ物もおいし
いので、太らないように努力す
るのも大切だ！と思いました。

新参者ですが…

札幌くらぶの会報を読みまし
た。演目や楽員さんたちについ
て本当に詳しく書かれていてす
ばらしいなと思いました。

札幌会員と札幌くらぶ会員に
いつも支えていただきありがた
うございます。新参者ですがど
うぞよろしくお願いたしま
す。

モノトーン好きには

ぴったりの北海道

部門もあつたり様々な形でも行
われています。
北海道は日本の中でもかなり
活動が盛んな地域なのでここに
来られて嬉しいです。

趣味と言え、フィルムカメラ
ラが好きで、デジタルと違って、
頭の中の記憶に残っているよう

が音波みたいです。

今まではフィルム一眼カメラ
しか持っていなかったのですが普
段の持ち歩きが難しかったので
が、最近コンパクトなフィルム

(担当 中居・村山)

弦楽四重奏の楽しみ

前回(103号)の寄稿で私の古楽活動を書かせて頂きました。ここ10年の私の活動にはもう一つ、弦楽四重奏への取り組みがあります。1991年から3年間私はウィーン国立音楽大学で学んでおりました。師匠はアルバン・ベルク弦楽四重奏団のトマス・カクシユカ教授。彼から沢山の事を学びましたが、カルテットのレッスンは一度も受ける機会がありませんでした。ウィーンから帰国し札幌に入団してからも、単発的にカルテットは演奏していましたが、いつかは同じメンバーでベートーヴ

エン全曲をやりたいと思っていました。

ベートーヴエンの弦楽四重奏曲は第1番から16番までの16曲と単一楽章の「大フーガ」から成り、これは私見ですが弦楽四重奏曲のバイブルと言っても過言ではない作品群だと私は思います。他の作曲家もこの分野で素晴らしい作品を残していますが、ベートーヴエンの作品はどれを取っても他を凌駕しているように思います。例えば、シューベルト

は第14番作品131を聴いて、「この後でわれわれに何が書けるというのだ？」と述べたと伝えられています。

私は2015年から22年までの7年間、ロメウス弦楽四重奏団でベートーヴエン全曲完奏する事が出来ました。いままたメンバーを換えて全曲演奏に取り組んでいます。マクシミリアン弦楽四重奏団と、ベートーヴエンの



マクシミリアン弦楽四重奏

パトロンであったロプコヴィッツ侯爵のミドルネームが由来です。今回は全員札幌員で、たまたまですが男ばかりの4人組です。第1ヴァイオリンは桐原宗生さん(札幌首席奏者)、第2ヴァイオリンは土井奏さん(札幌奏者)、チェロは猿渡輔さん(札幌首席奏者)です。

このチクルス公演はベートーヴエンの弦楽四重奏曲のみでプログラムしています。2023年の5月23日に1回目の公演を行い、年2回のペースで開催する予定で、最終回の2027年は、これは偶然ですがベートーヴエンの没後200年の記念イヤーに当たります。200年経っても色褪せるところか常に新しい発見があるこの作品群に弦楽器奏者として携わる事が出来るのは非常に嬉しい事です。全体では4年半の長い道のりではありますが、皆様と共に公演を開催して行きたいと思っております。皆様のご来場をお待ちしております。

最後に、お読み頂き、誠にありがとうございます。ありがとうございました。

札幌交響楽団

ヴァイオラ奏者

物部憲一

◎ブルックナー：交響曲第9番

現在この曲は様々な版の楽譜が出版されていますが、10月定期ではオーレル校訂版(ハース版とも呼ばれます)を使用します。札幌ではブルックナーの9番自体は以前に何度か演奏してありますが、今までのオーレル校訂版では演奏したことがなかったため楽譜は所有していませんでした。ブルックナーの楽譜は新校訂版の場合はレンタルのみのことが多いのですが、このオーレル版のパート譜は売られていますので、今回の公演のために新たに購入することにしました。

◎ドヴォルジャーク：アメリカ弦楽合奏版

9月の名曲コンサートで演奏しますが、この曲は元々弦楽四重奏曲です。今回は弦楽オーケストラで演奏できるようにコンラバスのパートを加えてアレンジされたものを購入することにしました。

◎武満徹：アステリズム

5月定期で演奏することの曲は、著作権の関係上購入することはできず、レンタルで取り寄せることとなります。札幌初演という生演奏で聴ける貴重な機会です、ぜひお聴き逃しなく。

◎ワーグナー：パルジファル 前奏曲

ワーグナーのオペラの前奏曲といえ、マイスタージンガー前奏曲やタンホイザー序曲のようにプログラムの定番曲というイメージでしたが、なんとパルジファル前奏曲は9月定期で札幌では初演になるということで驚きました。楽譜も持っていないので、この機会に購

札幌交響楽団

ライブラリアン

中村大志

楽譜支援金で購入した楽譜について

2023年度 札幌交響楽団楽譜支援金 支出内訳

作曲者	曲名	楽譜代	備考
1 ブルックナー	交響曲第9番	127,420 円	2024/10 定期
2 ワーグナー	パルジファル前奏曲	38,742 円	2024/ 9 定期
3 ドヴォルジャーク	アメリカ	26,032 円	2024/ 9 名曲
4 武満徹	アステリズム	313,170 円	2024/ 5 定期
合計		505,364 円	

小春日和の北ドイツの抒情

物悲しげながらも瞑想的なチェロ・ソロで始まる第3楽章アンダンテは、ブラームスのピアノ協奏曲第2番変ロ長調作品83 最高の聴きどころである。夢見るような眼差しでゆったりと客席の奥深くまで忍び寄るチェロのフレーズはやがてピアノのソロに引き継がれ、ひとつひとつの音のつづがまるで人生の場面場面を回顧するように控えめに駆け巡る。それは目に深い悲しみを湛えながらも、小春日和のぬくもりをたたくむ自画像のようでもある。過ぎ去りし日の

思い出をなぞるかのようなピアノによる語りはチェロ・ソロの再現によって、冒頭の切なき漂う抒情の世界に引き戻される。いつの頃からか、僕はブラームスのこの楽章が好きで好きでたまらなくなりました。それはこの音楽をひとつの文学作品と重ね合わせずにはいられないからである。文庫本で50ページ少々、短編小説『みずうみ』は僕にとって少年期からバイブルのような存在であった。「老人」Der Alteの描写で始められ、老人(ラインハル)の少年期から青年期の回想が簡潔ながらもイメージ豊かにつづられ、最後に「老人」Der Alteの切なくも淡々とした表情でしめくくられる、まさに同じ手法ではないか。

これが北ドイツ人のエートスなのだろうか。そういえば、『みずうみ』の作者テオドル・シュトルムもブラームスもほぼ同時代を生きた北ドイツ出身者であった。とかつ雰囲気豊かに奏でていた。加えて石川祐支氏のチェロ・ソロの小春日和にたたずむような味わい、これこそ演奏会詣での醍醐味である。

11月21日の札幌ヒタル定期演奏会は正に僕が抱き続けてきたこの作品のイメージをほぼ満たしてくれるものだった。ショパンとは相性のよくなかったゲルハルト・オピッツではあるが、手の内に入っていたブラームスでは面目躍如、ドイツ系ピアノ協奏曲最後といってもよい名曲(シエーンベルクにもあるが)が内包する喜怒哀楽の機微を堂々

会員/村岡範男



ピアノ:オピッツ 指揮:パーメルト

(写真協力 札幌交響楽団)

想が簡潔ながらもイメージ豊かにつづられ、最後に「老人」Der Alteの切なくも淡々とした表情でしめくくられる、まさに同じ手法ではないか。エリーザベトへの熱い想いが実らず生涯を独身で過ごした「老人」ラインハルト、親友シユーマンの妻クララに恋心を抱きながらも、生涯それを言い出せずに結婚生活のぬくもりとは縁がなかったブラームス。不器用としか言えないような禁欲的ロマンティスト、

パリ オペラ座ガルニエ宮 見学

ボンジュール。

11月の初め、フランス旅行の最後にパリのオペラ座を見学して来ました。

ナポレオン3世により公募で選ばれた35歳のガルニエが設計し、1875年に完成。正面はオリピックに向けてお色直ししていたのですが、中に入ると豪華絢爛そのもの、円形ロビーから大階段と高さ30メートルにおよぶ豪華な吹き抜けの間。ここも素敵なのですが、なんと

いつでも観客席の素晴らしいこと。五層の観客席は2200人収容で天井画はジャガール。450人の踊り子が壇上に乗るそうです。こんな舞台上にいる人や観客席で観る人はどんな感動が待っているのだろうか？と、色々な想像をしながらゆつくり90分程見学して来ました。できることなら生のステージを観てみたいものです！

150年前の建物が現存して活かされる文化の素晴らしさに

「30周年記念誌」への資料提供のお願い

「札幌くらぶ」は、2026(令和8)年8月に創立30周年を迎えます。現在、「30周年記念誌」発行に向けて、準備会のスタッフで資料収集と原稿執筆を進めているところです。編纂にあたっては、過去の作成物や写真などの資料があまり残されていないことが最大の障害になっています。会員の皆様には、お手元に次の資料がありましたら、データ提供または現物をお借りすることはできないでしょうか。

ご協力をよろしくお願いいたします。

◎「札幌くらぶ」コンサート

第1回から第9回までのチラシ・プログラム・写真

◎交流会・練習見学会の写真(年月日、場所も含めて)

連絡先

30周年記念誌発行準備会 代表 武藤義典

メール:muto@sakkyoclub.net



テラス席からのステージ

感銘を受けます。

近くのレストランでランチをいただき(もちろんワインも)、後ろ髪を引かれるように帰国の途につきました。

そして飛行機に搭乗して一休みしたところで座席モニター画面で音楽を検索するとクラシックの部門に、なんと札幌交響楽

団のワルツがあるではないですか。プレゼントをもらったように感激して二度聴いて日本に到着。後で調べると2021年の名曲シリーズでした。

追伸、パリには二つのオペラ座があり、今回の見学はオペラ座ガルニエ宮で、もう一つはオペラ・ヴァスティエヌ。メトロの駅名もオペラです。それでは皆さんも旅に。オニヴァ!

会員/神秀夫

僕の愛聴盤⑧

巨匠がたどりついた熟成の味わい 品格漂う職人芸

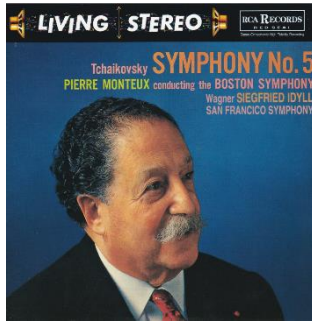
○交響曲第5番木短調作品64

(チャイコフスキー)

ピエール・モントゥー指揮

ボストン交響楽団

(58年録音)



ハーモニー交響楽団で絶対君主として君臨した、指揮者のエフゲニー・ムラヴィンスキーは、かつて第5番こそチャイコフスキーの交響曲の本命なのだこの作品への思い入れを語っていた。第6番「悲愴」ではなく、である。基本的に僕も同感である。夢も希望も絶望のどん底に沈んでゆく作品74よりも、全編を支配する主題(運命の動機)が最終楽章でホ長調に転じられ、光明を見出そうとする肯定的姿勢にロシア民族のたくましさを感じるのである。

1938年から1988年の死まで、レニングラード・フィル

それよりも、第2楽章アンダ

みとした表情がいつそう聴く者をひきつける。憂鬱に彩られながらの、束の間の平和のぬくもりが心地よい。

ここでは本場のムラヴィンス

キー盤ではなく、あえてモン

トゥー晩年の録音を推したい。1

913年に「春の祭典」の初演を

手掛け、作品とともども全世界に

シヨックを与えた彼は、ここで

は好々爺として実に味わい深い

チャイコフスキー像を描いてい

る。自己顕示に走るのでもなく、

何かを仕掛けるのでもなく、こ

く自然体の呼吸が聴く者をやわ

らかく包み込むのである。これ

が晩年に至って到達した巨匠の

風格であろうか、ロシア臭さを

強調する生き方とは対極にある

が、力みから開放された佇まい

が素晴らしい。

65年も前の録音であるもの

○テロ協奏曲口短調作品104

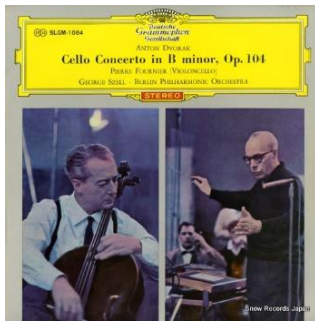
(ドヴォルザーク)

ピエール・フルニエ指揮

ジョージ・セル指揮

ベルリン・フィルハーモニー

(62年録音)



の、当時のボストン交響楽団の
高い技術と優秀な録音水準に驚
かざるを得ない。それにしても
この楽章でのオーボエの対旋律
が実にきれい。

定していた以上の化学反応を生
み出したのかもしれない。

それらを超えて僕を魅了して

やまないのは、ピエール・フルニ

エのチェロ、ジョージ・セル指揮

／ベルリン・フィルによる60年

代初頭の録音である。知的で厳

格なセルの音楽性がボヘミアの

土臭さと相性が合うのか危惧さ

れたところだが、彼独特の筋肉

質の引き締まった構力が素晴

らしい。彼は、この傑作の民族性

よりも純音楽的美しさを追求し

たのだ。冒頭から大詰めまでの、

弛緩することのない緊張感に、

聴く者は襟を正さずにはいら

れない。はるか60年も前の時点

で、こうしたアプローチに挑ん

だ指揮者の先見性を讃えたい。

それに負けず劣らずに心を打

たれるのは、明度が高く気品に

満ちたフルニエの独奏である。

硬質ながらも貴族的な香りがフ

レーズの隅々を潤しているでは

ないか。まさに孤高の芸である。

作品自体がもつ土俗性を超え

た、普遍的な美しさにあふれる名

盤中の名盤。僕のコレクション

のなかで、いまだに色褪せてい

ないのだ。

会員／村岡範男

スタッフの声

▼十勝平野から見る日高山脈の
美しさ。芽室、パイロ、幌尻
岳 築古岳からえりも岬まで
続く稜線。昨春秋はこの山並
みに心が癒され、週末ごとに
帯広にいた。テントに潜り込
み、ビール片手に見上げる夜
空には、無数の星が輝いてい
る。枯葉の香りを含んだ秋の
風、虫の声、星の降る音に合
わせて心に響く、シューベルト
の歌曲「冬の旅」が繰り返し心
に響く冬の旅、こんな至福の
ひと時を秋も音楽も私に教え
てくれた。(尾形)

▼年を取っても好みは変わるも
のだ。長い間飲んでたコー
ヒーのことである。こんな苦
い飲み物のどろろがいいのだろ
うと思っていたのが、ある時、
美味しいと感じたのである。
今ではコーヒー豆を買って、
自分で挽いて飲むまでにな
り、さらには好みの豆を探し
ながら楽しんでる。同様に
長い間シンフォニーばかりを
楽しんできたが、最近は弦楽
四重奏にはまっている。好み
は変わるものだ。(寒河江)

ありがとうございました

ヴァイオラ奏者 水戸英典さん



「39年間でしたが、支えてくださって
ありがとうございました。
これからも、礼響への応援をよろしく
お願いいたします。」

2023年11月30日退団

ドヴォルザーク最高の名曲だ
けあって、かつてより名盤がひ
しめいていた。なかでも、デュ
プレの男勝りの覇気にあおられる
とともに(チェリビダツク指揮
とバレンボイム指揮の2種があ
る)、ロストロポヴィチとカラ
ヤン／ベルリン・フィル盤の超
弩級のスケールに我を忘れたり
もした。作品自体が持つローカ
リティが触媒効果となって、想